

# 明治用水取水口の変遷

## 1. 頭首工の移り変わり

明治用水が開削された1880(明治13)年、台地の開削田を増やすためには水の確保が最も重要だった。最初の取水口は現在の頭首工より約2,000m上流にあった。川の中に粗朶(木の枝)を敷いて木杭を打ち、割石と礫(小石)を積み上げ水をせき止め、同様に粗朶と礫で長い堤防をつくって現在の取水ゲート地点から用水へ引き入れていたが、洪水で流される度に多くのお金をかけて修繕していた。

組合(土地改良区の前身)では堅牢な堰をつくるため、築港等の工事で多くの実績をもつ人造石の発明者服部長七に新堰堤の工事を依頼し、堰は8年の歳月をかけて1909(明治42)年に完成した。この堰堤は兩岸の岩盤を支えとしたアーチ式で回転構造をもつ樋門を備え、さらに船通し閘門や魚道も整備した。このような近代的な設備を備えた堰堤は、全国でも先駆的なものだった。堰堤の完成により台地の開発も進み、1910(明治43)年開催の関西府県連合共進会へ出品された堰堤模型と水利事業成績書は、農商務大臣から一等賞金牌を受賞した。

現在の頭首工は重力式コンクリート堰堤(フローティングタイプ)で、農林水産省の事業として旧堰堤(2代目)から280m下流に、1950(昭和25)年から1958(昭和33)年にかけて築造した3代目の堰堤である。1978(昭和53)年から6年の歳月をかけて都市用水と共用するための予備ゲートや下流の護床を補修し、1981(昭和56)年からは水源管理所内に設置した遠方監視制御装置で操作している。



【出典】 HP「水土の礎」一般社団法人 農業農村整備情報総合センター  
(地域の礎-明治用水農業水利事業-明治用水取水口の変遷,片桐正己著) 2022